

信州大学繊維学部の施設概要（抜粋）

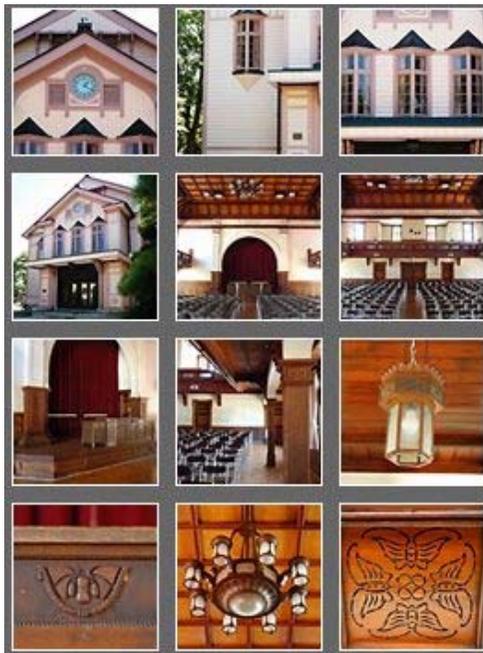
まち並みウォッチングin上田
（アーキテクツガーデン2012プログラム）



平成24年6月23日
信州大学繊維学部

信州大学繊維学部の前身は上田蚕糸専門学校で、明治44年(1911)四月に開校しました。当初は養蚕科と製糸科で発足し、大正8年(1919)に絹糸紡績科を設置しました。

講堂は、昭和4年(1929)に完成し、設計は文部省建築課、施工は桝屋組でした。講堂の形式は、木造二階建、切妻造、瓦棒[かわらぼう]鉄板葺、下見板[したみいた]張りの建物で、正面に切妻破風を二段重ね、三角の張り出し窓を付け特徴ある外観構成となっています。様式的には木造ゴシック系の建物ですが、入口の持ち送りや三角の張り出し窓、時計回りの意匠には、直線を生かしたセセッションの意識がみられます。セセッションは過去様式からの分離を意識的に行った新様式で、アールヌーヴォーが曲線的であるのに対して直線的で、実用性を重視している様式です。松本市の旧松本高等学校の校舎(大正9年)も表現は異なりますが同じ様式で建てられています。

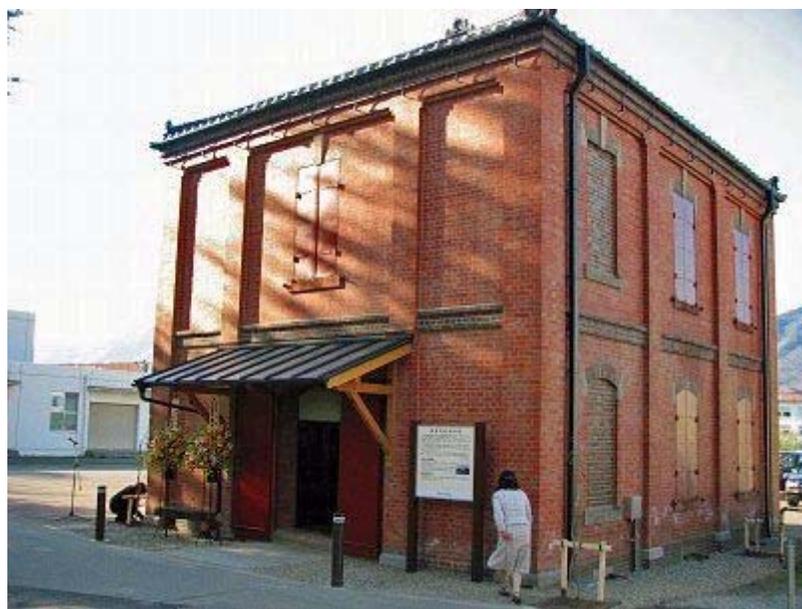


講堂の内部は、中央を吹き抜けとし、前後の二階に控室、側面側にギャラリーをとっています。窓は二連の上げ下げ窓です。内部仕上げをみると、床は寄木[よせぎ]張り、壁は漆喰[しっくい]大壁で腰板張り、天井は中央吹き抜け部分では折上格天井[おりあげごうてんじょう]としています。

特徴は、全体ではセセッションの様式がみられることです。また、ペアの意匠が多いのも特徴で、正面入口の脇の柱・持ち送り、内部ギャラリーの化粧桁、格天井のフレームの繰り形などにみられます。この講堂で他に例をみない特徴は、蚕糸のシンボルである桑・繭・蛾[が]が各所に意匠として付けられている点です。入口の天井の換気口には繭と蛾、ステージの柱には桑、アーチの縁飾りには蛾と桑、演台には蛾と繭、脇台には桑が使われています。いかにも蚕糸専門学校の建物という表現といえましょう。

上田市文化財マップから

登録有形文化財(1998.9)
近代化産業遺産(2007.11)



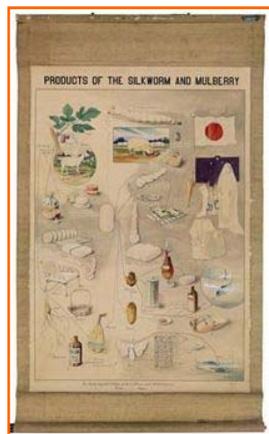
繊維学部資料館

100周年記念事業の一環として整備し、繊維学部の「ルーツ」と「ファイバー工学の最先端」を間近にご覧いただけます。

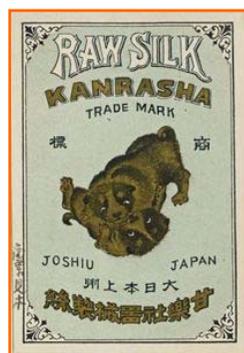
明治44年(1911年)建造のレンガ倉庫・旧貯繭庫(ちよけんこ)を、蚕業教育の歴史を伝える資料館として整備しました。

レンガ倉庫・旧貯繭庫は2階建て延べ約100平方メートルで倉庫として使われていました。

今回、繊維学部保存されていた上田蚕糸専門学校(明治43年・1910年)時代からの教材として使用されていた織物の端切れを紹介した「織物見本帳」や、当時の製糸科2回生が全国の製糸会社から商標を集めて学校に寄贈した輸出用生糸の商標「生糸商標標彙帖(いじょう)」、娯楽を利用して正しい養蚕法を広めようとした「養蚕寿古六(すごろく)」、養蚕技術書、同専門学校時代の写真など、貴重な多くの資料を常設展示として一般公開しました。



掛図: 蚕と桑からの産物
(上田蚕糸専門学校の教材)



犬2匹(金) →
RAW SILK;KANRASHA;大日本上州;甘
楽社器械製絲 (生糸商標彙帖)



